

# 福島県塙町の日刊地域紙『夕刊はなわ』 における紙面構成の変遷

山 田 晴 通

はじめに

福島県塙町の『夕刊はなわ』は、1958年6月に創刊され、現在も存続している日刊地域紙である。同紙は、山田(2021)で取り上げた、福島県の南東部のJR水郡線沿線を中心とした地域に集中して存在する、小規模ながら週に5日以上刊行される「日刊」の「ペラ新聞」のひとつである。その中で、『夕刊はなわ』が特筆されるのは、創刊以来の紙面の大部分が公共図書館で公開されているという点である。

筆者は別稿(山田, 2021)において、福島県中通り南部のJR水郡線沿線に点在する小規模日刊地域紙群について論じる中で、『夕刊はなわ』の沿革についても言及した。石川町の『町民ニュース』を起点として、ガリ版刷りの日刊地域紙という他に類例が乏しい形態の新聞が、相互に人的つながりをもちながら各地へ拡散していった流れの中に『夕刊はなわ』も位置付けられ、地域に定着して現在に至っている。本稿は、そこでの議論を踏まえ、塙町立図書館に保存されている『夕刊はなわ』の概要を紹介するとともに、同紙の紙面構成の変遷について簡単なスケッチを試みるものである。

## I. 『夕刊はなわ』の概要

『夕刊はなわ』は、棚倉町の『夕刊たなぐら』に勤務した経験があった小貫正男によって、1958年6月1日付で創刊された。後に、1973年9月から2か月ほど矢祭町の『夕刊やまつり』と「友情合併」して『夕刊はなわ やまつり』が矢祭町にも配布された時期を挟んで、『夕刊はなわ』という紙名が現在まで継承されている。

創刊号は、活版印刷B4判2ページであったが、次いで現存する39号以降は青インクのガリ版刷りB5判2ページの体裁を取っていた。活版印刷が何号続いたかは定かではないが、早い時点で、当時近隣の各町で刊行されていたものに準じたガリ版ペラ新聞の体裁をとったことになる。購読料は、創刊当時が月額50円で、以降、数年ごとに小刻みに引き上げられ

福島県埴町の日刊地域紙『夕刊はなわ』における紙面構成の変遷

たが、現在の月額 1300 円は、1998 年に改定されてから 20 年以上変わっていない。[表 1]

『夕刊はなわ』は、概ね 1964 年頃までは、B5 判ペラが標準で、時折例外的に B4 判になる場合もレイアウトは縦位置とされていた。その後、1965 年から、B4 判用紙を半分に分った形の B5 判 4 ページ建てが定着した。

概ね 1970 年代までは、広告も含め全ての紙面がガリ版によって制作されていたものと思われる。1979 年 7 月には、広告を中心にイラストの掲載が始まっており、おそらくはこの時点でファクシミリ製版機が導入されたものと思われる。9 月末にはインク色が黒インクとなり、11 月からは広告や記事に写真が頻繁に掲載されるようになった。ファクシミリ製版の導入によって、ガリ版に特徴的な細めの文字は、やや太めの手書き文字へと移行した。広告も、完成原稿として持ち込まれたもの以外は手書き文字で作成されていた。

ワープロ印字の導入は、いち早く広告で 1985 年春ころから取り組まれ、数年のうちに広告からは手書き文字がほとんどなくなった。しばらくは、手書きの記事とワープロ印字された広告が紙面に共存することとなったが、これはこの時点ではワープロの方が融通の利かない、時間がかかる手段だといった判断があったのであろう。記事がワープロ化されたのは 1997 年 4 月であった<sup>1)</sup>。

また 1980 年代から、本来の 2 面と 3 面の間の折り代にも記事を印刷し、1 面と 4 面の折り代=背の部分には広告を入れるという変則的なレイアウトが始まった。本稿では、便宜的にこのスタイルを「B4 判変則 2 ページ建て」と呼ぶこととする。B4 判変則 2 ページ建ては、B5 判 4 ページ建ての 2 面と 3 面の間を繋げたものと理解できるが、このようなレイアウトがいつ始まったのかは、実は判然としない<sup>2)</sup>。『夕刊はなわ』は 1980 年頃までは概ね B5 判 4 ページ建てであったが、広告が入ると増ページされて B5 判 8 ページ建てとなることがあり、1980 年代を通して 8 ページ建てとされることが多かった。1980 年代初めには、B5 判 8 ページ建ての 4 面と 5 面の間を繋げた紙面が時折展開されることがあり、同様のレイアウトが B5 判 4 ページ建ての 2 面と 3 面の場合にも見受けられた。1984 年初めには、このようなレイアウトが定着し、紙面の角には「(3)、(4)」などとページ数が表示されているものの両面が一体化して記事・広告がレイアウトされる B4 判変則 2 ページ建ての状態になった同年 9 月 8 日付 7731 号からは、ページ数の表示が全てなくなった。

創刊時から発行人として紙面に記載されていた小貫正男の名は、1996 年 7 月 9 日付 11146

表 1 購読料月額の推移

1958 年 6 月	創刊	50 円
1962 年 11 月	改定	60 円
1965 年 1 月	改定	80 円
1967 年 10 月	改定	100 円
1970 年 6 月	改定	150 円
1973 年 1 月	改定	200 円
1974 年 6 月	改定	300 円
1977 年 3 月	改定	400 円
1978 年 6 月	改定	500 円
1980 年 4 月	改定	650 円
1984 年 1 月	改定	800 円
1992 年 1 月	改定	1000 円
1998 年 6 月	改定	1300 円

号までで掲載が止まり、翌 10 日付 11147 号からは発行人の名が記載されなくなった。後には、2007 年 6 月 13 日付（号数表示なし）から、発行人として小貫信江の名が記載されるようになったが、これも 2014 年 3 月 3 日付（号数表示なし）を最後に記載されなくなり、現在に至っている。

現在の『夕刊はなわ』は、B4 判横長の位置で表裏 2 面のペラ印刷という類例の少ない独特の形態となっている。これは上述の B4 判変則 2 ページ建てのレイアウトから、2007 年 6 月以降に、B5 判 4 ページと見た場合の背の部分にも記事が印刷され、完全に B4 判横位置 2 ページ建てという特異なレイアウトとなったものである。なお、現在は、編集作業はコンピュータ上で完結しており、既然大貼りの工程はなくなっている。

夕刊はなわ社は、発行部数などについて、取材に応じていないので、公称部数もないことになるが、世帯数 3000 余りの埴町において、その大半に至る高い水準の普及があるものと考えられる。いわゆる「黒枠広告」の類も堅調に紙面に掲載されており、地域に根ざし安定した経営をおこなっていることがうかがわれる。

ちなみに埴町には、1999 年に無代広告紙として創刊され、2017 年に有料化された朝刊紙『埴タイムス』が、同じく日刊地域紙として存在しており、こちらは B4 判縦位置 2 ページ建ての体裁、1000 部弱の部数で発行されている。

## II. 埴町立図書館における『夕刊はなわ』の所蔵状況

現在、埴町立図書館が所蔵し、公開している『夕刊はなわ』の紙面現物は、保管状態によって 3 つのシリーズに分かれている。これは、現在の図書館が開館した 1992 年 4 月以降の紙面に加え、それ以前に個人が保管していた紙面を綴った冊子体のものが、2 シリーズ寄贈されているためである。埴町立図書館は、これら呼び分ける特段の呼称を用いていないが、ここでは便宜的にそれぞれをシリーズ A～C と仮称しておく。

シリーズ A は、埴町長なども務めた地方政治家で、郷土史家でもあった金澤春友（1884-1974）が手控えとして綴っていたもので、創刊号を含む最初期から 1973 年 6 月までの範囲が、数か月ごとにまとめられ、合わせて 41 冊のほぼ B5 判の冊子になっている。これらの冊子は、その都度作成されたものと思われ、背表紙に手書きされた文字にも様々な不統一がある。

シリーズ B は、加藤静次郎の所蔵印があり、仮製本ながらシリーズ A よりもしっかりと製本され、ページの縁の裁断もされている冊子体で、1965 年の紙面の一部がまとめられた第 1 冊と、1967 年から 1993 年までの範囲が、数か月ごとに B5 判より一回り小さめの冊子になっており、それが合わせて 80 冊ある。おそらくは特定のタイミングで数十冊をまとめて冊子化したものと思われ、統一的に装丁されているが、綴りの乱れがあちらこちらにあり、

福島県塙町の日刊地域紙『夕刊はなわ』における紙面構成の変遷

特に1970年の分の綴りには年をまたいだ綴りの乱れがあるなど、単純に時系列を追えない箇所が散見される。

シリーズCは、紙面の縁にパンチ穴を穿ち厚紙と紐で閉じただけのもので、必要に応じて綴りを解くことが可能である。塙町立図書館が開館した1992年4月以降の紙面が、年ごとに綴られている。

これら3つを用いると、創刊時の1958年から現在までの大部分の紙面を確認できるわけだが、当然ながら一部には欠落している部分もある。創刊直後の分を綴ったシリーズAの最初の冊子は、上述のように活版印刷B4判2ページでの創刊号が含まれているが、その直後の号は失われており、次いで現存する青インクのガリ版刷りB5判2ページの39号までの間のどのタイミングで体裁の変更がおこなわれたかは、察することができない。その後も、収録されている紙面は間欠的になっており、連続して紙面を確認できるのは、創刊から4か月が経過した10月3日付の第101号以降となっている。また、シリーズAは1964年の後半がそっくり欠けた状態で冊子化され、この欠落を無視して通し番号も打たれており、他のシリーズでも確認できないこの部分は、塙町立図書館が所蔵する『夕刊はなわ』にとって最大の欠落となっている。

これ以外にも、日付や号数が連続せず、何らかの欠落のあることが疑われる箇所は近年に至るまで散見される。最近の例では、2020年12月25日付、第17102号の次に綴られているのが2021年1月5日付、第17105号となっており、年末年始に2号分が欠けた状態となっている。それでもなお、創刊から60年以上分の日刊地域紙の紙面の大部分が、公共図書館で閲覧できる『夕刊はなわ』は、管見する限り、日刊地域紙としては極めて例外的に良好な保存状況にあるといえる。

### III. 号数表示の乱れと刊行頻度の推定

ほとんどの新聞と同様に、現在の『夕刊はなわ』には、2面の上部に号数が表示されており、例えば、2021年3月31日付には、第17163号と明記されている。これを前提に考えれば、1958年6月1日付の創刊以来、62年10か月で、年平均に換算して273号ほどが刊行されてきたことになる。しかし、これは単純には鵜呑みにできない数字である。

実は、『夕刊はなわ』の号数表示には、何度か錯誤が重ねられた歴史がある<sup>3)</sup>。直近の紙齢は、2019年5月1日付の第16674号から再開されたもので、それまでの15年近い期間には、そもそも号数表示がなされていなかったのである。号数表示は2004年6月15日付の「第12689号」の後、翌16日付から表示されなくなっていた。以降の14年10か月半の期間については、綴り（シリーズC）に紙面がない日付について、当該日の号が刊行されなかったのか、刊行されたが綴りから脱落したのかを確定することは、臨時的な休刊や、逆に本来

表2 年間刊行回数の推定

\* 現物が確認できない号の推定号数

\*\* 明らかな誤記をそのまま表示

\*\*\* 号数表示の乱れを考慮した推定刊行回数

年	年初号		年末号		刊行回数
1958	6月1日	1	12月29日	172	172
1959	1月1日	173	12月29日	462	290
1960	1月1日	463	12月29日	749	287
1961	1月1日	750	12月31日	1032	283
1962	1月1日	1033	12月31日	1321	289
1963	1月1日	1322*	12月31日	1630	298***
1964	1月2日	1630**	不明	1910*	280
1965	1月2日	1911	12月31日	2210	300
1966	1月2日	2211	不明	2506*	296
1967	1月2日	2507	12月31日	2803	297
1968	1月2日	2804	不明	3102*	299
1969	1月2日	3103	12月31日	3406	304
1970	1月2日	3407	12月29日	3705	299
1971	1月1日	3706	12月31日	4004	299
1972	1月2日	4005	12月31日	4303	299
1973	1月2日	4304	不明	4598*	295
1974	不明	4599*	12月31日	4892	294
1975	1月2日	4893	不明	5189*	297
1976	1月2日	5190	12月28日	5483	294
1977	1月2日	5484	12月29日	5781	298
1978	1月2日	5782	12月30日	6078	297
1979	1月2日	6079	12月31日	6375	297
1980	1月2日	6376	12月30日	6667	292
1981	1月2日	6668	12月29日	6935	292***
1982	1月2日	6936	12月31日	7230	295
1983	1月1日	7231	12月31日	7527	297
1984	1月1日	7528	12月31日	7822	295
1985	1月1日	7823	12月28日	8115	293
1986	1月1日	8116	不明	8412*	297
1987	1月1日	8413	12月31日	8706	294
1988	1月1日	8707	12月30日	9003	297
1989	1月1日	9004	12月28日	9296	293
1990	1月1日	9297	12月28日	9588	292
1991	1月1日	9589	12月28日	9881	293
1992	1月1日	9882	12月28日	10173	292
1993	1月1日	10174	12月28日	10453	280
1994	1月1日	10454	12月28日	10734	281
1995	1月1日	10738**	12月28日	10999	262
1996	1月1日	11000	12月28日	11258	259

年	年初号		年末号		刊行回数
1997	1月1日	11259	不明	10530*	272
1998	1月1日	11531	12月28日	10870	267***
1999	1月1日	11871	不明	12140	270
2000	1月1日	1241**	不明	12412	272***
2001	1月1日	12413	12月28日	12679	267
2002	1月1日	12680	12月27日	12949	270
2003	1月1日	12950	12月28日	12568**	269***
2004	1月1日	12569	12月29日	表示なし	
2019	1月1日	表示なし	12月28日	16851	
2020	不明	16852*	不明	17103*	252
2021	不明	17104*			

の休刊日における臨時的な刊行の可能性を考えると、非常に困難である。

そこで、号数表示がある期間について、各年の年初と年末の号数表示に基づいて、年間刊行回数を算出した。年初については、1月1日付の場合の他、1月2日付の場合であっても前年の最終号と連続する号数となっている場合はその号数を正しいものと見なした。逆に、1月2日付以降の場合で前年の最終号と連続しない号数となっている場合は、ケースごとに判断して年間刊行回数を概数として推定した。[表2]

創刊年の1958年は、6月1日付の創刊号から12月29日付の第172号までが刊行されており、これは年間に換算すれば295日ほどに相当する刊行頻度である。その後、年間290日前後から300日超という頻度での刊行が試みられた後、1970年代以降には、年間290日代の刊行頻度が定着した。1993年以降は、土曜休刊の拡大とともに刊行頻度が漸減して、年間270日ほどとなった。2004年からは号数表示が失われてこうした方法での刊行頻度の推定ができなくなったが、その後も段階的な土曜休刊日の拡大で、刊行頻度は漸減していったものと思われる。なお、号数表示が復活して以降、直近の2020年の刊行頻度は、年間252回程度であった<sup>4)</sup>。

以上によって推計した、創刊から2003年末までの累積発行回数は、13169回となった。仮にこの数値と、現在の号数表示の両方が正しいとすると2004年初から2019年末までの16年間の刊行回数は3683回となり、年間230日程度の頻度になってしまう。これは直近の刊行頻度に比べても著しく低い水準であり、実際の累積発行回数は、現在の公称の号数よりも概ね500回分程度は多いのではないかと推測される。

#### IV. 4時点における紙面内容の比較

60年以上の歴史の中で、紙面内容がどのように変化したのか、その手がかりを捉えるた

めに、1960年、1980年、2000年、2021年のそれぞれ3月第1週の紙面の内容を点検する<sup>5)</sup>。これら4時点は、草創期のB5判2ページ建てのガリ版印刷(1960年)、B5判4ページ建ての手書きファクシミリ製版(1980年)、B4判変則2ページ建てのワープロ印字大貼り写真製版(2000年)、直近のB4判2ページ建てのコンピュータ製版(2021年)と、それぞれ技術的な前提が異なっている。

4時点を通して、一貫しているレイアウト上の特徴は、1行10文字の5段組という点であり、余白を含めた1段の高さも43mmから44.5mmへとほとんど変化していない。この間、一般的な新聞の多くが段組、1行あたり文字数を大きく変化させてきたことは対称的である。一方、一段あたり行数は、B5判に対して1960年の38行から、1980年の34行、2000年の29行へ、またB4判に対して2000年の68行から2021年の63行へと、傾向的に減少してきている。文字を読みやすくする工夫は、もっぱら行間を広げることによって重ねられてきたことになる。

### 1960年3月の紙面

B5判2ページ建ての紙面には、1面に2本から5本、2面に3本から5本の記事が掲載され、総記事数は6本から9本であった。町議会議員選挙が近づいていた時期に当たっていたことから、各地区の推薦会の記事など、町議選がらみの記事が連日にわたって掲載されていた。また、「町議選に望む!!」と題された投書も1件掲載されていた(1日)。

広告は両面とも、多くて2段強、少なくても1段が割かれており、件数は3本から8本であった。

1面のレイアウトは、まだ流動的で、日によって広告の量にもレイアウトにもばらつきがあった。少ない日は、広告は下1段だけであったが(1日)、下2段の日もあれば(2日、7日)、小さな広告の組み合わせで、事実上1.6段程度(3日、5日)から3段程度(4日)と、その日によって大きく変わっていた。

### 1980年3月の紙面

B5判4ページの紙面には、各面に1本から3本の記事が掲載され、総記事数は5本から9本であった。この時期には、B5判1面の典型的なレイアウトが固まっており、その基本的なパターンは、その後もB4判変則2ページの1面左側まで長く影響を残した。[図]

1960年に比べ、紙面量が倍増しているにもかかわらず、記事本数が増えていないように見えるのは、写真の導入によって紙面が大きく埋められるようになったためである。「思い出の写真」と題されたコーナーは、古い写真とその紹介記事、広告だけで1面を埋めるもので、記事量の多少の増減はありながら<sup>6)</sup>、頻繁に掲載されていた(1日、3日、4日、5日)。「思い出の写真」の掲載がないときには、別の写真が紙面に必ず掲載されるようになってお

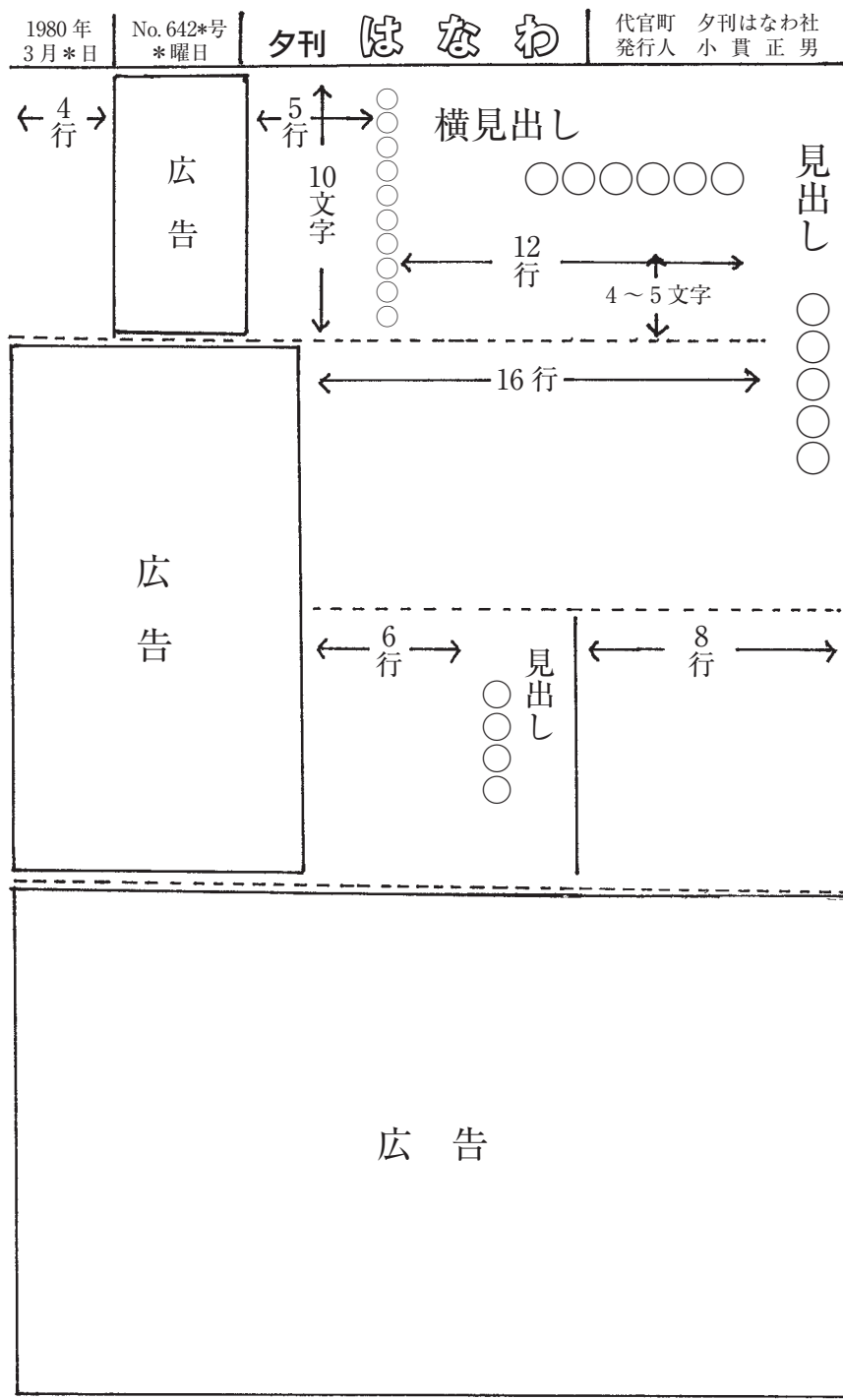


図 1980年3月の典型的な1面レイアウト

(原寸の85%縮小に相当)



り、写真の導入が紙面づくりに大きな変化をもたらしたことがわかる。

広告は各面とも、多くて3段分、少なくても2段分が割かれており、件数は7本から9本であった。1960年に比べ、紙面量の倍増以上に広告の面積は増えており、広告1件あたりの面積も増えている。ただし、この時点では広告への写真の導入は行われておらず、持ち込まれた完成原稿からファクシミリ製版した広告も一部に見られるものの<sup>7)</sup>、数の上では例外的で、広告の大部分は手書きで作成されていた。

### 2000年3月の紙面

この時点の紙面は、ワープロ印字大貼り写真製版によって製作されていたものと推定され、記事、広告とも手書き文字は全く見られなくなっている。

B4判変則2ページの紙面には、1面に2本から3本、2面にも2本から3本の記事が掲載され、総記事数は4本から5本であった。1面左を占めるトップ記事が2面にまたがるのが常態化しており、2面側の欄外に矢印が入って、1面からの継続であることが示されている<sup>8)</sup>。

1980年の紙面と比較すると、写真はあまり目立たないものとなっている。1段から1段半程度の高さの、あまり大きくない写真が両面に数点並ぶといったパターンでの使用が多くなっている。

広告は、1面中央の折り代に4cm幅、1段強の4本が入っているほか、両面とも2段分強から3段分が割かれており、件数は12本から16本であった。いわゆる「黒枠広告」も堅調に入っており、期間中に死亡通知4件、御会葬御礼3件が掲載されていた<sup>9)</sup>。

### 2021年3月の紙面

B4判2ページの紙面には、両面とも2本から4本の記事が掲載され、総記事数は5本から6本であった。

広告は両面とも概ね2段分弱から2段分半ほどが割かれており<sup>10)</sup>、件数は5本から7本であった。ページ下2段を広告で埋めきることができない場合、下2段まで記事がわずかな行数（最も短いものでは1日1面の2行）流されているが、これは2000年には見られなかったレイアウトである。逆に、2000年の時点で常態化していた1面から2面への記事の引き継ぎは、2021年の紙面には見当たらなかった。

写真の扱いは、2000年に準じており、1段ないし1段半の数点が各面に配されている。コンピュータ製版の導入によって、写真は以前より鮮明なものとなっている。

2000年に比べると、広告本数が減り、広告紙面量も若干減った分、記事量が若干増えたこととみなすことができそうである。これには、刊行頻度の減少も関係しているかもしれない。「黒枠広告」は期間中に死亡通知2件、御会葬御礼2件が掲載されていた<sup>11)</sup>。

以上、4時点における紙面構成の変化は、ある意味では目まぐるしいものであるようにも見える。20年おきに紙面を見ていくと、その時々技術的制約の前提の上で、レイアウトの工夫がなされていることがわかる。しかし、日々掲載されている記事の本数や記事量に注目すると、実はさして大きく変化していないようにも思われる。

一方、広告は、ここで紙面比較をしている中では、2000年をひとつのピークとして、緩やかに掲載量が後退している<sup>12)</sup>。各面の下2段が広告で埋まらず、その範囲に記事が入っていくという近年のレイアウトは、地域情報の提供という点ではともかく、地域紙の経営という観点からは危うい状態の反映なのかもしれない。

### おわりに

『夕刊はなわ』は、山田(2021)で取り上げた小規模日刊紙群の中でも、過去の紙面の保存、公開状況が最も良好な事例である。ガリ版ペラ新聞から発展したという特異な経緯や、地域に根ざした安定した経営が実現されている現状を踏まえれば、より詳細な紙面分析をおこなうに足る価値が同紙にはある。

その一方で、保存における欠落や混乱、また号数表示に見られる混乱など、史料として使用する際に、弁えておくべき問題点が少なからずあることも事実である。

本稿は、限られた時間の中で『夕刊はなわ』の過去の紙面に触れ、ごく一部の紙面から情報を読み取って整理したもの過ぎない。本稿によって『夕刊はなわ』の存在が広く知られ、日刊地域紙研究の重要な参照事例としてさらなる検討がなされる契機となるなら、筆者としては望外の喜びである。

### 注

- 1) 1997年4月5日付までは、記事は全面的に手書き文字であった。次の4月8日付は、記事も全面的にワープロ文字で印字されたが、その後も一部の記事が手書きになり、手書き文字とワープロ文字が混在する紙面が、4月9日付と4月17日付に見られた。(山田, 2021, p.13)

水郡線沿線の各紙がワープロへ移行した時期は、棚倉町の2紙が比較的早く、『東白日報』が1985年、『夕刊たなぐら』が1989年に記事のワープロ化を果たしていた。他の各紙は、概ね1990年代に記事のワープロ化を果たしており、最も遅れた古殿町の『北部日報』でも、1997年から5年ほどをかけてワープロによる制作へ移行した。

- 2) 塙町立図書館所蔵の現物では、この移行期に当たる1980年前後は、後述のシリーズBによって確認するしかない。シリーズBは製本されているため綴じ込まれている部分の印刷状況が確認できない。紙面の状況から判断して、2-3面(ないし8ページ建ての4-5面)の綴じ込み部分に印刷があると推測されるページがあっても確定はできていない。

- 3) 例えば、1981年の紙面では、1月9日付の第6674号の次が、10日付の「第6678号」と数字が飛んでしまったが、これは手書きの「5」が「8」に化けてしまい、以降の号数に影響を与えたものであった。同年2月3日付の第6696号の次は、4日付の「第6670号」となっており、号数が巻き戻されている。

また、1998年の紙面では、3月4日付の第11574号の次が、5日付の「第11675号」とされてしまい、さらに4月2日付の第11696号の次が3日付の「第11670号」とされるといった錯誤が重ねられていた。

2002年の紙面では、3月10日付の第12999号の次が、11日付の「第12300号」とされてしまい、そのまま11月13日付の「第12484号」まで進行した後、翌14日付から号数表示がなくなり、12月16日付が「第12509号」とされたものの翌17日付は「第12560号」とされる、というめまぐるしい混乱が重ねられていた。

なお、創刊号以来の紙面を網羅的に点検したわけではないので、十分に確認できていない範囲に、号数のズレがさほど大きくない錯誤の例がさらに含まれている可能性もある。

- 4) 号数表記の復活後、確認できる2019年最後の号は12月28日付の第16851号、2020年最初の号は1月6日付の第16853号で、欠落している第16852号は2020年に入ってから刊行されたものと推測される。また、2020年最後の号は12月25日付の第17102号、2021年最初の号は1月5日付の第17105号で、第17103号は2020年のうちに刊行されたものと思われる。
- 5) 1960年は、3月1日付第508号、2日付第509号、3日付第510号、4日付第511号、5日付第512号、6日付第513号の6日分（月曜日から土曜日）、1980年は、3月1日付第6423号、3日付第6424号、4日付第5425号、5日付第6426号、7日付第6428号の5日分（土曜日、月曜日から金曜日、ただし木曜日は欠落）、2000年は、3月1日付第12185号、2日付第12186号、3日付第12187号、4日付第12188号、6日付第12189号、7日付第12190号の6日分（火曜日から土曜日、月曜日）、2021年は、3月1日付第17141号、2日付第17142号、3日付第17143号、4日付第17144号、5日付第17145号の5日分（月曜日から金曜日）の紙面を参照。
- 6) 検討対象範囲からは少し外れていたが、8ページ建てとなった1980年3月9日付の6-7面に掲載された「想い出の写真 川上・福田屋前の今・昔」は、古い写真と対比される写真も掲載され、この記事と広告だけで2ページを使っていた。
- 7) 検討対象期間の広告で持ち込まれた完成原稿からファクシミリ製版された広告は、いずれも1980年3月7日に掲載された白河信用金庫の広告とトヨタカローラ棚倉営業所の広告の2件だけで、いずれもロゴやイラストは用いているが、写真は使っていない。ただし、対象期間から外れるが、1980年3月8日に掲載された藤井酒造店の広告と藤田電器の広告には、いずれも既存のパンフレット類から流用したと思しき写真が使われていた。
- 8) 例えば、2000年3月1日付1面左の記事「オウム進出『許さない』 埴町で対策協議会を設立」は、1面左いっぱいを使っても記事が途中となっており、2面1段目から続きが掲載されている。3月2日付1面左の記事「近藤議長ら五名を表彰 県町村議長会の総会で」は、同様に、2面3段目に続きが掲載されている（ただし、矢印は欠落している）。以降、3日付「平成12年度予算案など 五十三議案を一挙上程」、4日付「部長に生方氏選出 JAそ菜部で爽快ひらく」、6日付「当初予算一般会計 四十七億五八〇〇万円」、7日付「必要度・公平性が基本 行政運営の基本方針」は、いずれも1面左いっぱいを使っても記事が途中となっており、2面3段目に続きが掲載されている。

- 9) 対象期間中に死亡通知が掲載された4件は、対象期間語を含めるといずれも御会葬御礼が掲載されており、両者をセットにして広告掲載することが一般化していることがわかる。
- 10) 対象期間中に例外的に広告比率が大きかったのは、2021年3月1日付の2面で、紙面の左半分を占める農機具販売会社スズキアムテックの広告と、2段×13cmの死亡通知、合わせて3.3段相当が掲載されていた。逆に例外的に広告比率が小さかったのは、2日付の2面で、2段×16cm、すなわち1段相当しか広告が入っていなかった。ちなみに3月を通して広告比率が最小であったのは、11日付の1面が2段×13cm相当であった。
- 11) 2021年3月を通して「黒枠広告」は死亡通知6件、御会葬御礼6件の掲載にとどまっており、2000年の時点よりも出稿量は減っている。
- 12) 詳細な検討は行っていないが、広告量が最も多かったのは、1980年代末のバブル期から1990年代にかけての時期であったと思われる。この時期は、B5版8ページ建て（B4版4ページ建て）相当の紙面構成が頻繁におこなわれていた。

#### 文献

山田晴通（2021）：福島県中通り南部地域における小規模日刊地域紙群の形成，コミュニケーション科学（東京経済大学），54，pp.3-22.

#### 謝辞

本稿は、筆者が2020年度から2021年度にかけて取り組んだ、福島県における文献調査、聞き取り調査の成果を踏まえている。個々のお名前は挙げないが、本稿において明示的に言及されていない諸団体関係者の方々を含め、現地調査にご協力をいただいた皆さんに、深く感謝を申し上げる。特に、埴町立図書館の司書の方々には、郷土資料の閲覧に特段のご配慮をいただいたことに改めて感謝を申し上げたい。

本研究には、2020年度の東京経済大学個人研究助成費（20-29）「長期間存続した地域紙の紙面分析を通じた、存続基盤の長期的変化」、および、2020年度-2021年度の東京経済大学個人研究費の一部を用いた。